

論理の探究が独自性を毀損する？

——徳増多加志教授への応答——

川崎 誠*

『図書新聞』2012年3月31日付に掲載された徳増多加志・鎌倉女子大学教授の論考「ウィトゲンシュタインとソシュールの言語理解からヘーゲル、マルクスへ テキスト間の対応から「論理についての深い結びつき」を見出す書」は、私の著書『言語哲学への新視角——ウィトゲンシュタインはソシュールを読んだ！——』への書評である。そこには小著への疑念が率直に説かれており、それに対してきちんと応ずるのは著者としての責務であると思われた。その公表から時日を経ていることもあり、まずは書評の全文を引かせていただく。私の考えはその後に述べる。

この書は、書名が喚起するイメージに反して、最新の言語哲学的研究を踏まえ、新機軸を提起するものではない。副題が内容を半ば示している。半ばというのは、ウィトゲンシュタインとソシュールの関係ばかりでなく、ヘーゲルの『論理学』やマルクスの『資本論』との関係、更にソシュール的な言語観をもつ森重敏の言語理解も重要な要素として論じられるからである。その背後には、ウィトゲンシュタインとソシュールの言語理解を支える論理の原型がすでにヘーゲルに見出されるという理解がある。——この内容を見て本書をまともな研究と判断しない人も多いただろう。だが、著者はそうした反応を予想した上で、敢えて無理筋を推し進める。著者は、書簡や

*専修大学経営学部教授

証言に基づいて事実関係を明らかにしようとはしない。「ウイトゲンシュタインが『講義』や『大論理学』を読みそして『探究』を書いた、そのことを忠実に追思惟すべく、(中略)訳文とともに原文をも示す」(17頁)、これがこの書の行き方である。具体的には、それぞれの思想家の著作が「一文対一文あるいは一文対一節の対応関係」にあることを確認しながら進められる。(副題はレトリックと解すべきだろう。著者は、ウイトゲンシュタインがソシュール及びヘーゲルを直接「読んだ」か否かという問題を歴史的な逸話として斥けている [294頁] からである。)

各章で扱われる内容を列挙しておこう。第1章では、ソシュールの「第2回講義」とヘーゲル『論理学』の「絶対的理念」及びマルクス仏語版『資本論』第25章との対応を見ることで、「始元が限界を孕む構造を持つという論理」を見る。第2章は、ソシュールの「連合と統合の論理」とヘーゲルの「物の矛盾と解消」の論理との一致を確認する。第3章は、ソシュールの *signe* を仮象と捉えた上で、『論理学』の「反省論理」、マルクスの「価値形態論」との対応を見た上で、文字体系把握の論理を見ていく。第4章では、ウイトゲンシュタインの『哲学探究』第2部の「自然の傾向」に注目し、これとヘーゲル論理学の「反省規定」(「同一性」「区別」といった極めて抽象的な規定)との対応を追う。また、ここにマルクスの「価値形態論」の論理を見出す。第5章では、初期ウイトゲンシュタインの『1914-1916草稿』を扱い、これがヘーゲルの「概念論」の特に「特殊的概念」と『資本論』の「協業」に対応すると説かれる。また、ウイトゲンシュタインのこの草稿の後半の叙述とソシュールの『講義』の扱う言語事実との「一致」を見出す。第6章は、ウイトゲンシュタインの『1914年の口述ノート』の内に森重敏というソシュールリアンの国語学者に「通底する論理」を見出し、更にソシュール

ルの言語観を否定した時枝誠記への森重の批判を介して論点の明確化を図る。第7章は、ワイトゲンシュタインの『哲学探究』の189節から195節をソシュールの『講義』のいう「言語事実」に即して読み解こうと試みる。ここではヘーゲルの「度量」の論理が援用される。最後に補論で、『資本論』の「貨幣の資本への転化」と『論理学』の本質論の「絶対的なもの」との対応関係が確かめられる。

ソシュール、ワイトゲンシュタイン、ヘーゲル、マルクス、森重の各引用文はそれ自身が極めて難解であり、著者の解釈を理解するだけでも相当な忍耐を要する。個々を切り離せば、著者の解釈には首肯できる点も多い。しかし、引用箇所を選択は措くとしても、テキスト間に著者が見出す「対応」には疑問が残る。著者はこの「対応」から「論理についての深い結びつき」(295頁)を見出し、ワイトゲンシュタインはソシュールを読み、ソシュールはヘーゲルとマルクスを読み、ワイトゲンシュタインもソシュールもヘーゲル論理学を自家薬籠中のものとしていたと断言する。それはどういうことだろうか。ワイトゲンシュタインの思索はソシュールないしヘーゲルに解消し、ソシュールはヘーゲル(ないしマルクス)に解消するというのだろうか。「偶然と思われる一致から出発しながらその底に論理を探る」(295頁)ということは、論理という抽象的な場に問題を移し替えることである。そのように扱ったのでは同じような論理の運びが見られるのは当然ではあるまいか。むしろ、ソシュールは当時の言語学の素材を、ワイトゲンシュタインは論理実証主義ないし分析哲学的状況を前にして、それらに密着して透徹した思索を重ねることによって、独自の思想の場を切り拓いた。その独自性を見逃したのでは、哲学・思想研究は成立しないのではないか。私には、著者は本来の哲学・思想研究を進めるには、思想家のあいだに個々見出された類似性に目を奪われすぎているのではないかと思わ

れる。

《相当な忍耐》をしつつもお書評の労をとっていただいたことに、まず謝意を表さねばならない。第一に、《ワイトゲンシュタインとソシュールの言語理解を支える論理の原型がすでにヘーゲルに見出されるという[川崎の]理解》を正確に読み取り、第二には、小著が《ワイトゲンシュタインがソシュール及びヘーゲルを直接「読んだ」か否かという問題を歴史的な逸話として斥けている》点をも掬い取っていただいた。《この内容を見て本書をまともな研究と判断しない人も多いただろう》現状においては、この二点を抑えることはとりわけ重要である。というのは、さもないと《副題はレトリックと解すべきである》にもかかわらず、「ワイトゲンシュタインはソシュールを読んだ！」と言うからにはその証拠を示せ、それができない小著は《まともな研究》に非ず、そうした反応が実のところ少なくないからである。それゆえ著者としては、徳増教授が小著の狙いを理解してくれたことに素直に満足している。

けれども三パラグラフに披歴される《疑問》については承服しかねる点の少なしとしない。教授の論考に沿って箇条に挙げれば次である。

1. 《引用箇所を選択は措くとしても、テキスト間に著者が見出す「対応」には疑問が残る。著者はこの「対応」から「論理についての深い結びつき」を見出す。》
2. 《ワイトゲンシュタインはソシュールを読み、ソシュールはヘーゲルとマルクスを読み、ワイトゲンシュタインもソシュールもヘーゲル論理学を自家薬籠中のものとしていたと断言する。それはどういうことだろうか。ワイトゲンシュタインの思索はソシュールないしヘーゲルに解消し、ソシュールはヘーゲル（ないしマルクス）に解消するというのだろうか。》

3. ≪「偶然と思われる一致から出発しながらその底に論理を探る」(295頁)ということは、論理という抽象的な場に問題を移し替えることである。そのように扱ったのでは同じような論理の運びが見られるのは当然ではあるまいか。≫
4. ≪ソシュールは当時の言語学の素材を、ウイトゲンシュタインは論理実証主義ないし分析哲学的状況を前にして、それらに密着して透徹した思索を重ねることによって、独自の思想の場を切り拓いた。その独自性を見逃したのでは、哲学・思想研究は成立しないのではないか。≫
5. ≪私には、著者は本来の哲学・思想研究を進めるには、思想家のあいだに偶々見出された類似性に目を奪われすぎているのではないかと思われる。≫

(一)

逆順にはなるが、最後の≪疑問≫に応ずることから始めよう。徳増教授曰く、≪私には、著者は本来の哲学・思想研究を進めるには、思想家のあいだに偶々見出された類似性に目を奪われすぎているのではないかと思われる。≫

小著にも再三引用した『哲学探究』の一節がある。(なおこの稿では、ウイトゲンシュタインの引用は大修館全集版から、ソシュールのそれは岩波版『一般言語学講義』から、ヘーゲルは以文社版『大論理学』から、それぞれ訳文を借用する。)

234 しかし、われわれはまた、ふだんやるように(みんなが一致する等)計算しながら、なおその各段階で、魔力に導かれているかのように規則に導かれているという感じをもち、おそらくは自分たちが一致することに驚く、といったしかたで計算することができないだろ

うか。(神にそうした一致を感謝しながら。)

思わず「神に感謝する」ほど「われわれ(人間)」は「自分たちが一致することに驚く」。なぜ「われわれは驚く」のか。そうした「一致」が人間には《偶々見出される》にすぎないからである。小著でも触れたが、「魔力に導かれているかのように規則に導かれている von den Regeln wie von einem Zauber geleitet zu werden ; being guided by the rules as by a spell」は『国富論』の「みえない手に導かれて led by an invisible hand」を想起させ、後者で市場機構(需要量と供給量の一致)が個々の市場参加者にとっての偶然性であるように、前者での「一致」も個々の計算家にとっては偶然的である。このように、《偶々見出された類似性に目を奪われる》ことを重く視るのは当のワイトゲンシュタインなのであった。徳増教授はこの点を見落としている。それとも教授の所謂《本来の哲学・思想研究》には、ワイトゲンシュタインの哲学もまた含まれないのであろうか。

ともあれワイトゲンシュタインは《偶々見出された類似性》を重視する。重視すればこそ次の一節も置かれ、「一族 eine Familie」ということも生きてくる。

236 正しい結果には達するが、どうしてかが言えない芸術家はだの計算家。かれらは計算をしているのでない、と言うべきなのか。(一族をなすさまざまな場合)

仮に《偶々見出された類似性に目を奪われる》ことがないとすれば、「家族的類似性」の論点は成り立つまい。

では《偶々見出された類似性》はなぜ重要なのか。「驚き」が学の始元だからである。その始元は絶対知でなければならない、始元が相対的であればそれは欠陥の存する始元だからである((六)で触れるところがある)。けれども人間は直接に絶対的なものを捉えることができない。そのために

は偶性個別者の実体指示を俟つしかない。そして偶性は属性一般者に規制される。だから《偶々見出された》「一致」（同一性と区別との同一性）なのである。だから小著もまた《偶々見出された》テキスト間の「対応」に「驚き」（存在の開披）、探究を始めた（「まえがき」）。この立場から言えば、《この内容を見て本書をまともな研究と判断しない人》は「学問」の如何にあるかを理解していない。例えば小著が「思想的文脈・伝統的文脈の考慮」をしないという論難（野村恭史）の「学の始元」と無縁であることは、謂う所の「文脈」が要するに学界での通説にすぎないことに明らかである。

閑話休題。その一。次の「疑問」が出されようか。234節に謂う《偶々見出された類似性》は「計算結果」の「一致」であり、これに対して小著が主張するのは《思想家のあいだに偶々見出された類似性》である。そして《思想の独自性》に対しては「計算仕方」の多様は《独自性》と言うほどのことでなく、それゆえ「思想の一致」を「計算結果の一致」なる単純な事例と同列に説くのは飛躍である。かかる《疑問》である。そしてそれへの答えも236節が参考になる。「芸術家はだの計算家」の具体例として何が挙げられようか。私は次を採る。小学生に「 5×6 」なる問題を出し、口頭で表現しながら答だけを板書するように指示を与える。なぜ口頭かと言えば、『論理哲学論考』が次の注意を与えるからである。

3-143 命題記号が事実であることは、筆書や印刷という通常の表現形式によって隠蔽されている。Daß das Satzzeichen eine Tatsache ist, wird durch die gewöhnliche Ausdrucksform der Schrift oder des Druckes verschleiert.

というのも、例えば印刷された命題において、命題記号は語と本質的に異っているようにはみえないからである。Denn im gedruckten Satz z.B. sieht das Satzzeichen nicht wesentlich verschieden aus vom

Wort.

さて、日本人の子供は「ごろくさんじゅう」と発話しつつ「30」と板書する。ところが隣席の子供は「wǔ liú sānshí」と発話しつつ同じく「30」と板書する。それを聞いた日本人の子供は、隣席の子供が歌を歌いながら「正しい結果に達した」と思う。けれども隣席の子供は「どうしてかと言えない」——市場参加者と同様に、である。また日本人の子供の多くも、「ごろくさんじゅう」と唱えれば「どうして」30に達するのかわかることはできないだろう——。すると日本人の子供にとっては、歌うことで「計算する」隣席の子供こそは「芸術家はだの計算家」であろう。かかる「計算仕方」は十分に《独自》なのである。

その二。「謎が多い」とか「よく分からない」とか、ウイトゲンシュタインのテキストについてよく言われるところである。これはウイトゲンシュタインが言語活動 *langage* の多様に目を配っているのに対し、読者の側は言語を極めて限定的にしか捉えておらず、そのギャップによるところが大きい。言語の用例を採り上げず、作例で済ませてしまう研究などはその典型だが、用例の作例に比べて豊かであることは言うまでもあるまい。上に挙げた236節の例も外国籍の子供が教室で学ぶ地方の現実だが、そのことに思いを馳せることのできる哲学研究者は少ない。鋭敏な言語感覚はウイトゲンシュタインを研究する上で必須の資質である。

その三。上に学の始元について触れたが、『哲学探究』がアウグスティヌスの逸話を以て始まるのも、このことと無縁ではあるまい。アウグスティヌスはそこで言葉を「学んだ」が、その言葉とはたんなる言語 *langue* でもたんなる言 *parole* でもない「同一性と区別との同一性」だからである（「言がひとに理解され、そのすべての効果を生み出すには、言語が必要である；しかし言語が成立するためには、言が必要である。」（『講義』 p. 33)）。

その四。《本来の哲学・思想研究》がウィトゲンシュタインを斥けるのではないかと先には疑った。それだけではない。「一致の驚き」がウィトゲンシュタインにおける絶対知であるならば、《偶々》の契機を欠く《本来の哲学・思想研究》は、実はヘーゲルをも斥けるのではなからうか。

(二)

次に、《ウィトゲンシュタインはソシュールを読み、ソシュールはヘーゲルとマルクスを読み、ウィトゲンシュタインもソシュールもヘーゲル論理学を自家薬籠中のものとしていたと断言する。それはどういうことだろうか。ウィトゲンシュタインの思索はソシュールないしヘーゲルに解消し、ソシュールはヘーゲル(ないしマルクス)に解消するというのだろうか。》

上述したように、《(川崎は)ウィトゲンシュタインがソシュール及びヘーゲルを直接「読んだ」か否かという問題を歴史的な逸話として斥けている》ことを、徳増教授は見落とされなかった。そうであれば、《ウィトゲンシュタインはソシュールを読み、云々》もまた、これを《レトリックと解する》親切心を教授には期待したかった。小著副題「ウィトゲンシュタインはソシュールを読んだ！」の「！」が私自身の「驚き」であることは「まえがき」に記したが、一書としてのまとまりをもつ小著において「まえがき」で表明した立場は当然後続章に引き継がれる。さらに言えば、ウィトゲンシュタインと森重とに論理の通底を見た6章においても、両者が互のテキストを読んだとは考えにくいことを指摘した。つまりテキスト間の「対応」はあくまで私自身の読解においてのことである。このことは《著者(川崎)は、書簡や証言に基づいて事実関係を明らかにしようとはしない》と書かれた教授にはお分かりのことと思うのだが。

だから《それはどういうことだろうか。ウィトゲンシュタインの思索はソシュールないしヘーゲルに解消し、ソシュールはヘーゲル(ないしマルクス)に解消するというのだろうか》との問いにはいささか面食らう――

無論応えは「否」である——それにしてもなぜことさらに《思索の解消》と言われるのだろうか。考えられる理由は披歴される教授の論理観に関わるものだが、その点に触れるに先立って、ソシュールやウィトゲンシュタインの《独自性》に関して応じておこう。

(三)

《ソシュールは当時の言語学の素材を、ウィトゲンシュタインは論理実証主義ないし分析哲学的状況を前にして、それらに密着して透徹した思索を重ねることによって、独自の思想の場を切り拓いた。その独自性を見逃したのでは、哲学・思想研究は成立しないのではないか。》

最初の文に説かれる御説、教科書的には誠にゴッホなのだが、しかしかかる記述こそは二人の《独自の思想》を教科書風に《解消する》ように思われる。というのは、かかる記述において両者の《独自性》は相互に遠ざけられているからである。だが実際はどうか。いまソシュールの《独自性》を採り上げてみれば、それがウィトゲンシュタインの問題意識と異質であるとは思えない。『一般言語学講義』に次の叙述がある。

＜講＞ ある講演の席で、たびたび *Messieurs!* という語を連発するのを聞いたばあい、そのつどそれは同じ表現であるとの感じをもちはするものの、言い場所によって口調のちがいや抑揚のために、はなはだしい音的差異が現われる——そのはなはだしさは、ほかのばあいならばべつの語を区別させるほどである(参照, *pomme* と *paume*, *goutte* と *je goûte*, *fuir* と *fouir*, etc.) ; (p. 151)

これが共時論的な単位を問うていることは明らかなだが、実はこの問いは通時論的な単位の間いとも密接する。

〈講〉 さきに……（中略）……ある演説のなかで引きつづきなんども発せられた *Messieurs!* がいかにそれじたいと同一であるかを知ること、……（中略）……なにゆえに [フランス語の] *chaud* が [ラテン語の] *calidum* と同一であるかを知ることにおとらず興味があると、いうことができたのは、このゆえである。[*calidum*→*chaud* の] 第二問はじじつ[*Messieurs!* の] 第一問の延長であり、複合であるにすぎない。(p. 253)

さらに「第二回講義」（1908年11月30日）は次を説く。

言語学が扱う単位のこの規定は、そのもっとも緊急の仕事であるのみならず、それを行なうことで言語学はそのすべての仕事をすっかり成し遂げることになる。Non seulement cette détermination des unités qu'elle manie sera la tâche la plus pressante de la linguistique, mais ce faisant elle aura rempli sa tâche tout entière : (CFS No. 15 p. 37)

そうであればソシュールの《独自性》とはこの「単位」の把握でこそあるだろう。

では共時論的な単位への問いであると同時に、それが通時論的単位の問いでもあるような言語事実とは、如何様のものを挙げればよいか。ここでも言語事実にも敏感になるべく、次の文章を採り上げる（内館牧子「この途方もない言葉」日本経済新聞2011年2月19日）。

1月のある夜、テレビでニュースを見ていると、スマートフォンについて街頭インタビューをしていた。すると、30代らしき男の人が、次のように答えた。

「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」
 どうです、この日本語。「行けられる」ですよ、「行けられる」。

また、昨年の夏のこと。大きな試合に出場が決まったプロスポーツ選手が、テレビ番組で次のように話していた。

「自分が出られるとは思わなかった」

どうです、この日本語。「出られる」ですよ、「出られる」。

これらは「ら抜き」の言葉を認めた弊害である。彼らは「～することができる」という「可能」のニュアンスを伝えなかったのだと思う。「ら抜き」の場合、「出れる」で「可能」は示せし、「行く」は「ら抜き」とは関係なく「行ける」で示せる。しかし、日常的に「ら抜き」で話している人にとって、そこに「can」のニュアンスはこもっていない気がしたのではないか。そして咄嗟に出たのが「行けられる」であり「出られる」だった。

だが、彼らを一方的に責めるわけにはいかない。責められるべきは「ら抜き」を許したことだ。常套思考の「言葉は生きもの。変化は当然」を猛省する必要がある。

先ごろある女性国会議員のインタビューをテレビで見たが、みごとなままでに「ら抜き」で語る。もしかしたら「週末は地元に戻れた」とでも言うかと思ったが、さすがにそれはなかった。興味深かったのは、「ら抜き」で語る彼女の言葉に、画面表示ではすべて「ら」が加えられていたことだ。テレビ局の良心を見た気がした。

「行けられる」と「行ける」の同一性問題は現代日本語という共時態における単位の問題であるとともに、「行く」の可能表現の変遷という通時的な単位の問題でもあるから、「なにゆえに「行けられる」が「行ける」と同一であるかを知ること」はソーシャルの取り組む課題である。この課題に如何に応ずるかを詳述する余裕はないが、いま留目すべきはこの課題

が『哲学探究』234節に通底することである。というのは、「行けられる」を耳にして「どうです、この日本語。「行けられる」ですよ、「行けられる。」と歎ずる脚本家は、実に234節の「われわれ」と同じ立場にいるからである。このことは「われわれ」の驚きを、「どうです、この計算。歌を歌うんですよ、歌を。」と表わして明瞭であろう——脚本家が「神にそうした一致を感謝する」ことはなく、したがってその論理も234節とは異なる段階で把握されねばならないが、ともあれ脚本家が「行けられる」を歎ずることのできるのは、それと「行ける」に或る種の「一致」が存してこそである——。

このようにソシュールとウイトゲンシュタインの《独自の思想の場》は、これを哲学教科書ならぬテキストに即して採り上げれば存外親近する。その親近を直視することが《独自性を見逃す》こととは思われない。ソシュール研究にせよウイトゲンシュタイン研究にせよ、これまでの研究がかかる親近を認めなかったのは、両者のテキスト双方を「論理的構文論」（後述）の視点から精読した者がいない、ただその結果であるにすぎない。

(四)

徳増教授謂う所の「論理」についてである。《「偶然と思われる一致から出発しながらその底に論理を探る」（295頁）ということは、論理という抽象的な場に問題を移し替えることである。そのように扱ったのでは同じような論理の運びが見られるのは当然ではあるまいか。》

だが、《「偶然と思われる一致から出発しながらその底に論理を探る」ということは、論理という抽象的な場に問題を移し替えることである》と、私は思わない。『論理哲学論考』に次の一節がある。

2-02331 あるものが他のものの持たない性質を持つか、それとも総ての性質を共有する複数のものが存在するか、このいずれかである。

前者の場合は、当のものを直ちに記述によって他のものから際立たせ、それを指摘することが可能である。しかし後者の場合に、それらのうちの一つを指し示すことは全く不可能である。

何故ならあるものが何によっても際立たされないのなら、私はそれを際立たせることができない。さもなければ当のものはまさしく際立たされていることになるであろうから。Denn, ist das Ding durch nichts hervorgehoben, so kann ich es nicht hervorheben, denn sonst ist es eben hervorgehoben.

独語を付した二パラグラフの各種邦訳には実は誤訳も目立つのだが、今それは問わない。ともあれここでの主題が「不可識別者の同一」と関わることは明らかだろう、「総ての性質を共有する複数のもの」における「あるもの」の把握が問われているからである。そしてウイトゲンシュタインは、「総ての性質を共有する複数のものが存在する」にもかかわらず、その「複数のもの」の区別において「あるもの」を特定しない。これは『大論理学』の次の叙述に通ずる。

<大> 相互に等しい二つの物は存在しないという命題は表象作用 [日常的な考え方] に対して奇異な感じを与える、ライプニッツがこの命題を提起して・多くの木の葉のなかから二枚の等しい木の葉をみつだけせるかどうかさがしてごらんなさいと貴婦人たちにすすめたという宮廷での逸話 [をきいたそ] ののちにも [やはり奇異な感じを与える]。——人びとが宮廷で形而上学にたずさわり、しかも形而上学の諸命題を吟味するのに木の葉を比較するといったこと以外の努力を必要としなかった [とは]、形而上学にとって幸福な時代 [があったものだ]。(2 p.65)

「あるものが何によっても際立たされないのなら、私はそれを際立たせることができない。さもなければ〔すなわち何によっても際立たされないにもかかわらず、私がそれを際立たせることができるなら〕当のものはまさしく〔そのままですなわち複数のものが性質を共有するままに〕際立たされていることになる」と説くウイトゲンシュタインもまた、「複数のもの」を「比較するといったこと以外の努力の必要」を認めるからである。そしてかかる「努力の必要」は、果たして≪論理という抽象的な場に問題を移し替えること≫であるだろうか。かかる努力を放棄して、学的認識はむしろ「表象作用」に留まるべきなのか。≪論理という抽象的な場≫と言えはなるほど俗耳には入り易い。それは「人間誰しも同じようなことを考える」という別の俗説と表裏であり、実際教授も≪同じような論理の運びが見られるのは当然ではあるまいか≫と続けられる。だが俗説は二つ重ねても真説になりえない。むしろその重なりは精緻な探究をそれだけ深く妨げる。

そもそも「論理」とは「抽象的」であるのか。そうではなく、抽象的にのみ働く思考には論理の進展が抽象的に見える、それだけのことではないのか。この点はソシュールのテキストの読解を例に（六）で具体的に述べる。

次に、異なるテキスト間に≪同じような論理の運びが見られるのは当然≫であるのか。しからば教授は『論理哲学論考』の次の叙述を如何に読むだろう。

3-33 論理的構文論においては記号の意味はいかなる役割も演じてはならない。論理的構文論は記号の意味を論じることなく提起されるものでなければならぬ。諸表現の記述を前提することだけが許されているのである。In der logischen Syntax darf nie die Bedeutung eines Zeichens eine Rolle spielen; sie muß sich aufstellen lassen,

ohne daß dabei von der *Bedeutung* eines Zeichens die Rede wäre, sie darf *nur* die Beschreibung der Ausdrücke voraussetzen.

3-331 この見解からしてラッセルの「タイプ理論」が眼に入ってくる。ラッセルの誤謬は、記号の規則を提起する折に、記号の意味について話をせねばならなかった点に示されている。Von dieser Bemerkung sehen wir in Russells “Theory of Types” hinüber: Der Irrtum Russells zeigt sich darin, daß er bei der Aufstellung der Zeichenregeln von der Bedeutung der Zeichen reden mußte.

これらの精確な読みは別の機会に譲らざるをえないが、ともあれ「記号の規則を提起する」ために「記号の意味」を離れねばならないことは確かに説かれている。そしてウイトゲンシュタインの探究した「論理的なもの Logisches」がその「記号の規則」において把握されることも言うまでもない。テキストこそ異なれその《論理の運び》というものが、仮に《当然》と謂われるほどに《同じような》ものであるのなら、「論理的構文論」はそれこそ瑣事に拘泥していることになるだろう。私には、教授謂う所の「論理」がヘーゲルやウイトゲンシュタインのそれとは随分隔たっていると見えるのだが、如何であろう。

(五)

《引用箇所を選択は措くとしても、テキスト間に著者が見出す「対応」には疑問が残る。著者はこの「対応」から「論理についての深い結びつき」を見出す。》

《引用箇所を選択は措いた》上での《「対応」への疑問》である。するとそれは小著が異なるテキスト間に《「論理についての深い結びつき」を見出す》ことへの《疑問》であろう。つまり教授と私の論理観の相違であ

り、ヘーゲルやワイトゲンシュタインとは異質に見える教授の「論理」観については上に見た。ここではさらに一步踏み込んで考えてみたい。

上にも引いたように、教授は「著者（川崎）は、書簡や証言に基づいて事実関係を明らかにしようとはしない」と書かれる。そしてこれは本当のことである。ではなぜ「書簡や証言に基づいて事実関係を明らかにしようとしぬ」のか、そのことを教授は考えられたらどうか。『哲学探究』に次の一節がある。「基数列に通じている生徒」をテストしたというのである。

185 ……（前略）……いま、生徒に1000以上のある数列（たとえば「 $+ 2$ 」）を書きつけさせる、——すると、かれは1000, 1004, 1008, 1012と書く。

われわれはかれに言う、「よく見てごらん、何をやっているんだ！」——かれにはわれわれが理解できない。われわれは言う、「つまり、君は2をたしていかなきゃいけなかったんだ。よく見てごらん、どこからこの数列をはじめたのか！」——かれは答える、「ええ！でもこれでいいんじゃないのですか。ぼくはこうしろと言われたように思ったんです。」——あるいは、かれが数列を示しながら、「でもぼくは[これまで]同じようにやってきているんです！」と言った、と仮定せよ。——このとき、「でもきみは……がわからないのか」と言い——かれに以前の説明や例をくりかえしても、何の役にも立たないだろう。——われわれは、そのような場合に、ひょっとするとこう言うかも知れない。この人間は、ごく自然に、あの命令を、われわれの説明にもとづいて、ちょうど「1000までは常に2を、2000までは4を、3000までは6を、というふうに加えていけ」という命令をわれわれが理解するように、理解しているのだ、と。……（後略）……

問題の所在の那邊なるかは繰り返さないが、ともあれそれが閑問題でないことは言うまでもあるまい。そして仮に《書簡や証言に基づいて事実関係を明らかにした》としても、そうした《事実関係》に対して人は生徒と同じ反応を向けることができる——ウイトゲンシュタインはなぜ草稿類の廃棄を命じたのか。それもこれとの関連において考えるべきことだろう——。勢い論理の登場を願うことになると思うが、その際教授の「論理」はその期待に充分応えうるか。もし論理が《論理という抽象的な場》にあるものならば、「ええ！ でもこれでいいんじゃないのですか。ほくはこうしろと言われたように思ったんです」という実感信仰の前に、それは無力なのではあるまいか。

(六)

最後に、《「偶然と思われる一致から出発しながらその底に論理を探る」》ことにより《同じような論理の運びが見られるのは当然であり》、そこでは《独自の思想》を《見逃す》ことになる、という徳増教授の《疑問》の杞憂であることを、小著からの引用で具体的に示してみよう。小著における読解の、むしろ《独自の思想の場》を照射することが分かるであろう。

小著第1章の「ソシュール「第2回講義」の論理展開」では、ソシュール「第2回講義」(XVI講)をヘーゲル『大論理学』(絶対的理念章の「1始元論」2パラグラフ)・マルクス『フランス語版資本論』(25章2節14～30パラグラフ)と対比させつつ読み解くことでその論理の展開を探った。次はその冒頭部分だが、後述に必要な補遺を[]内に付しておく。

(α) 程度の差はあれ近接した一時代を採り上げることができる On peut prendre une époque plus ou moins rapprochée ;

「第2回講義」のこの文は『大論理学』第1文および『仏語版』14パラグラフに対応する（以下「講義」と『大論理学』のみ原文も掲げる。『仏語版』に関しては注目する語句のみ原語を示す）。

<大> それで始元は方法の上から見るときは、単一なかつ普遍的なものという規定態以外のいかなる規定態ももたない Der Anfang hat somit für die Methode keine andere Bestimmtheit als die, das Einfache und Allgemeine zu sein ;

<仏> 社会資本を構成する個別的資本の各々は、一見して、一人の資本家の手中への、生産手段と労働を持続させる手段との若干の集積を、表現しており、個別資本が蓄積されるにつれて、この集積も拡大する。つまり、蓄積は、富の再生産要素を増大させながら、同時に、これらの要素の私的企業家への手中への集積を増大させる。しかしながら、蓄積の必然的帰結であるこの種の集積は、程度の差はあれ狭隘な限界内で運動する。

さて当然のことだが、「講義」は直前の叙述内容を承けているので、初めにそれを参考に挙げておく。これは「1始元論」の1パラグラフ、『仏語版』の25章2節「協業、マニユファクチュア的分業、機械など…」に対応する。

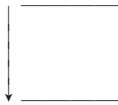
[参考] 音韻論が扱うのは一定の先行状態と関係する音的要素の状況だが、その先行する状態は目印 *point de repère* として捉えられるべく十分に知られている；それは通時態すなわち或る状態から他の状態への通時的移行を立てることに帰着する *revient à*。音ないし音群を採り上げる：

*ka**tša**θa* (英語)

が確認される、あるいはラテン語群がサヴォワ語で次のようになったことが確認されよう。

<i>semnare</i>	↓	<i>femna</i>	↓
<i>senā</i>		<i>fena</i>	

人は先行状態との関係において音的要素の状況を確定する以外にない；さもなければ音韻論に残るものは何もないだろう。第二の部門は———で表わす：第一の部門を通時的な矢で表わせる：



何かしら（～であると）言うためには常に前の時代が必要である。

(α) の読解に戻ろう。『大論理学』で方法とは、「主観は自分の方法を通じて客観と結びつくのであって、客観において自分だけで自己自身と結びつくのではない」(3 p.355) とされるそれである。そして『仏語版』では、「近代産業が労働を肥沃にするために用いる方法は、すべて一つ残らず、剰余価値または純生産物を増大させるための、蓄積の源泉を供給するための、資本によって資本を生産するための、方法でもある」(13パラグラフ) と説かれる。その近代産業の「出発点 le point de départ」(同) は「或る先行的蓄積」(同) である。

そこで『大論理学』前半と『仏語版』の1・2文に次の対応関係が存する。「始元」(出発点)：「蓄積」, 「方法」：「集積」。「蓄積は集積を増大する l'accumulation opère leur concentration croissante」が、それは当の「蓄積に見合って à mesure qu'il s'accumule」・それ(再生

産要素の増大)と「同時に en même temps」である。つまり「集積」は「蓄積がそれを通じて増大する」ところの「自分の方法」である。そして「必然的 obligé」な「蓄積」はそれゆえ「単一なかつ普遍的なものという規定態」であり、そうであればその「必然的帰結 le corollaire obligé」であるこの種の集積は、程度の差はあれ狭隘な限界内で運動する entre des limites plus ou moins étroites」。同じく「始元」ka の必然的帰結である ka→t̥sa→θa も、程度の差はあれ近接した一時代において運動するのである。[いま理解を容易にすべく、親世代が ka と発音し子世代が t̥sa と発音するとせよ（或いは現代日本語で、子世代が格助詞「を」を wo と発音する傾向にあることを想起すれば、理解はさらに容易であろう）。その ka はもちろん先行諸世代の発音の「蓄積」である。つまり ka は「単一なかつ普遍的なものという規定態」であり、必然的帰結である ka→t̥sa も、例えば親と子というように近接した一時代において運動する。]

(β) しかし、もし二本の線が一本になると、音韻論で言うことはもはや何もない(一状態の音の記述は音声学であるだろう)。mais quand les deux lignes se rejoindront, il n'y a plus rien à dire on phonétique (la description des sons d'un état serait de la phonologie).

<大> このことはそれ自身規定態なのであって、その規定態のために始元は欠陥をもっている。dies ist selbst die Bestimmtheit, wegen der er mangelhaft ist.

<資> 種々の生産領域に配分されている社会資本は、そこでは、蓄積運動すなわち累進的な規模での再生産運動を相並んで通過する多数の個別資本という形態を採っている。この運動は、まず富の構

成要素の余剰分を生産し、次にこの余剰分を、すでに結合され資本の役を果たしている富の構成要素の諸群に付け加える。これらの諸群の一つ一つ、すなわち個々の資本が、その既得の大きさと再生産力の程度とに比例して、これらの追加要素を増やし、こうして固有の活力を行使し、この活力を拡大することによって他と区別されるその存在を維持し、他の諸資本の行動領域を制限する。したがって、集積運動は蓄積と同数の諸点に分散されるばかりでなく、相互に独立した多数の個別資本への社会資本の分割が、強固になる。というのは、まさにどの個別資本も集積の相対的な原点として機能するからである。

「どの個別資本も集積の相対的な原点 *foyer de concentration relatif* として機能する」・換言して「個々の資本が他の諸資本の行動領域を制限する *limite la sphere d'action des autres*」のだから、どの個別資本も「それ自身規定態であり」、そのために「始元は欠陥をもっている」。欠陥とはそれが「相対的」であること・それゆえ「相互に独立した多数の個別資本への社会資本の分割 *fractionnement* が、強固になる」ことである。「講義」での「分割」は「二本の線」である。その「二本の線が一本になる」ならもはや通時態ではないが（一状態の音の記述は音声学であるだろう）、かと言って二本のままではそれは媒介されたもの・「規定態」であるから、ここでも「始元は欠陥をもっている」。「親世代・子世代が「相対的な原点として機能する」・換言して「個々の世代」が「他と区別されるその存在を維持し、他の世代の行動領域を制限する」ことによる「欠陥」である。具体例は脚本家の慨嘆「どうです、この日本語。」、これである。けれども上述のように、実際にはその脚本家自身「行けられる」を理解しているのだから、このことは言語交通において「個々の世

代」が「他の世代の行動領域を制限する」ことのないことを示唆している。たとえ耳障りであろうと、言語交通そのものは途絶えていないのである。]

長い引用となったが、ここでもソシュールがヘーゲルやマルクスを「読んだ」か否かは問題でない。検討すべきは、「第2回講義」に『大論理学』や『仏語版』と《同じような論理の運び》を見る私の読解がソシュールの《独自の思想》を《見逃す》ことになるか、である。けれども、「程度の差はあれ近接した一時代」と「程度の差はあれ狭隘な限界内」の対応が「或る状態から他の状態への通時的移行」として親子間の言語交通を示唆し、しかし話手聞手が「相対的な原点」とされるときその言語交通も浅い把握に留まる（始元が欠陥をもっている）ことなど、テキスト間の対応が教えるところは決して小さくない。それどころか、ソシュールの《独自の思想》の如何なるものかをむしろ明らかにする。ソシュール説が「他者」を欠落しているとの批判はマルクスやウイトゲンシュタインとの対立においてよく説かれるところだが（例えば、柄谷行人『探求』¹⁾）、以上の読みはそうした主張の如何に的外れであるかを如実に示すであろう。徳増教授の《疑問》を杞憂とする所以だが、無論同じことがウイトゲンシュタインのテキスト読解に関しても言えるのである。

徳増教授も謂うように、ウイトゲンシュタインのテキストは《それ自身が極めて難解である》。そのような《難解な》テキストの読解は、当のテキストと真摯に向き合うことによってしかなしえない。しかるに時として哲学研究の「伝統」はドクサとして振舞い、真摯な探究を妨げる。教授の謂う《本来の哲学・思想研究》は、果たしてそうしたドクサと無縁であろうか。ウイトゲンシュタインの哲学・思想を、彼についての研究からでなく、ウイトゲンシュタインその人から学ぶ。「本来の哲学・思想研究」と

しては言わずもがなのこのことを、「応答」の最後にやはり記さねばなるまい。

注

- 1) 柄谷のソシユール評の特徴は、単位 *unité* を巡っての「通時論と共時論のアンチノミー」(第二回講義) という、ソシユール説の核の一つにほとんど注意を払わないことである。そして同じ傾向は丸山圭三郎のソシユール研究にも認められ、ソシユールにおいて駆使される弁証法論理への丸山の理解はすこぶる浅い(その一端は小著でも指摘した)。丸山が日本のソシユール研究をリードしたことは紛れもない事実だが、その抜群のあまり、丸山の描くソシユール像がソシユールの実像であると受け取る、そうした偏向もまた否定できないようである。